

栗花落 光（つゆり・ひかる）先生

株式会社 FM802 代表取締役専務

1948 年 京都市生まれ。

同志社大学経済学部卒業後、

ラジオ大阪(大阪放送株式会社)入社。

報道部 放送記者を経て、制作部で音楽番組中心に担当。

1988 年 株式会社 FM802 に開局メンバーとして参加。

編成部長、常務取締役を経て 2007 年から代表取締役専務。

【参考ホームページ】・funky802.com ・cocolo.jp ・radiko.jp



《講義概要》

株式会社 FM802 代表取締役専務としてメディア産業の最前線で活躍する栗花落光氏が、デジタル時代のラジオと音楽について講義を行った。

講義ではまず、ラジオ産業の歴史や音楽シーンにおけるラジオの関わりについて年代別に分かりやすく説明。その中で、ラジオからヒット曲を生み出し、ラジオの影響力を音楽マーケットに示した FM802 のビジネス戦略について解説し、多様化するメディアビジネスにおいて、ポリシーやこだわりを貫き、独自性のあるマーケティングを展開することの重要性を伝えた。続いて、ラジオ産業の新たな試みであるインターネットラジオの現状と今後の展望について詳しく解説し、デジタル化に柔軟に対応したビジネスモデルの構築が大切であることを示した。さらに、デジタルラジオについても分かりやすく説明し、まだ課題が多く難航している実態や、多チャンネル化によるコンテンツの多様化に対してコンテンツの質や供給能力が追いついていない現状を伝えた。

最後に、大きな変革の時期であるメディア産業において、どのようなコンテンツがどのような形態で残っていくのか今後の大きなテーマであると言及し、学生はラジオの魅力を再確認するとともに、今後のさらなる展開への軌道を見据える講義となった。

《受講生の感想》

●他のラジオ局と差別化を図るというポリシーに基づいた選曲など、独自の路線を貫徹する姿勢はラジオに限った話ではなく、コンテンツ産業全体において重要なことであり、こういった理念を掲げた方が、よりクリエイティブなものが生まれ、産業はより活性化すると思った。
立命館大学・政策科学部・4 回生

●将来、人気が出そうなアーティストをピックアップすることは、新人アーティストの育成に繋がり、音楽業界の発展に貢献するだろうと感じた。ネットラジオという比較的新しいジャンルのメディアを生み出すことで、従来のラジオとは違った形で聴かれ、楽しまれるようになってきていることを学んだ。また、ライブ動員数が増えていることに注目し、様々なイベントを主催することでラジオメディアへの意識を集めようとする工夫は素晴らしいと感じた。

立命館大学・産業社会学部・1 回生

●インターネットやスマートフォンなど最新技術を活用し、従来よりも聴きやすい環境になっていて、時代の流れに対応して進化していることがよく分かった。ラジオの持つ強みは、先生のおっしゃった通りの温かみだと実感した。ラジオ特有の親しみやすいDJのトークやリクエストなど、数あるメディアの中でもより視聴者と送り手の距離が近いところにあり、他にはない重要な魅力だと実感した。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

●ラジオというメディアの特徴や歴史についてよく理解できました。チャンネル過多により、コンテンツの質や量が足りていないというお話がありましたが、こういった時代であるからこそ、プラットフォームに加え、優れたコンテンツホルダーであることが重要なことなのだろうと考えました。1社2派制作やデジタルラジオといった展開は、今日初めて知りました。

立命館大学・映像学部・3 回生

●今日はデジタル時代におけるラジオを巡る現状と課題を知ることができ、今までで自分が何気なく聴いていたラジオの裏側にある業界の事情を知り、改めてラジオについて興味を持つことができました。また、PCやスマホを使ってラジオを聴けるというのは便利で、私は以前よりラジオを聴く機会が増えました。ラジオのリスナーを増やしていくためにはデジタル化というのは有効な手段であるように思いました。

立命館大学・法学部・3 回生

●ラジオはリスナーからのリクエストで音楽を流したり、ヘビーローテーションのように局が推している音楽を受動的に聴くことができ、他のメディアにはないラジオというメディアの大きな強みだと思う。テレビや雑誌などより一層連携して、それらのユーザーをラジオに取り込むことができれば、ラジオはより一層強力なメディアになるのだろうなと強く感じました。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

